十勝川治水100年記念事業
トークリレー

帯広畜産大学　学長
長澤　秀行　氏

十勝毎日新聞
令和5年5月15日　2面　掲載

十勝毎日新聞

十勝川治水100年 トークリレー ⑨

清き流れ 自然の脅威学ぶ

帯広畜産大学長　長澤秀行氏

「柏の下に露(つゆ)汲(くみて〜」の前口上で始まる帯広畜産大学逍遥(しょうよう)歌の2番の歌詞は、「流れて清き十勝川、堤に若芽萌(も)ゆる頃、吾(わ)が喜びに舞い踊る、友の情けは胸をうつ」です。入学して間もなく、この逍遥歌を暗唱することが碧雲寮生の務め。旭川からやってきた私は、実際に目にするよりも前に「清き十勝川」は脳裏にしっかりとインプットされていました。

2016年の記録的豪雨の影響で十勝川が氾濫した折、私は帯広市の国際姉妹都市である米国ウィスコンシン州マディソンで、十勝川温泉のホテルも浸水したというニュースを聞きましたが、にわかに信じられませんでした。当時、私は帯広ラグビースクールの校長をしていました。練習場として使用していたのが、十勝川河川敷グラウンド。水没した結果、大切なラグビー練習のための用具が流され、水が引いた後は、グラウンドが石ころだらけとなり、復旧に時間がかかりました。

十勝の発祥、全国有数の農業酪農地帯の形成、農畜水産業の興隆に大きな要素となっている十勝川です。河川空間を利用した運動施設では、子どもから大人まで、サッカー、野球、ラグビーなど、大いに楽しんでいます。「清き十勝川」は、私たちに多大な恩恵を与えてくれるとともに、自然の脅威も教えてくれる大きな存在として、あらためて認識させられます。気候変動による自然災害を想定内として把握し、引き続き適切な治水事業を進めていただきたいと思います。

◇　◇

十勝川の治水事業は今年、100周年の節目を迎えた。治水事業と関わりのある関係者の思いや将来に向けたメッセージを紹介する。

（随時掲載）

十勝川治水100年